

現代文明と『法華経』の思想的意義

バートン・ワトソン

宮田幸一 訳

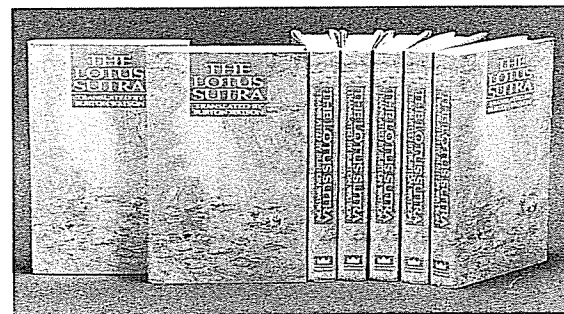
私は「二十一世紀と『法華経』」というテーマで書いて欲しいという依頼を受けたが、そのテーマにより、どの程度『法華経』が来るべき二十一世紀の人々にとって時宜に適ったものでありうるのか、また『法華経』のどのような側面が時宜に適ったものでありうるか、を論じて欲しいということだと思う。私は二十世紀の人間であるから、来世紀の人々にとって『法華経』がどのように見られるか、ということについては当然推測するしかない。そして私はアメリカ人であるから、アメリカ人の目で、より大胆に言えば、西洋文明という背景の中で育ってき

た人間の目で、見ることも当然であろう。

理念的に言えば、宗教的あるいは哲学的事柄を扱った教典は、その思想が真に健全であるならば、その教典が出現してからどれほど年月が経過していようと、どの世紀にとっても当然重要であり、時宜に適っていると思われる。しかしながら、その教典の根本的な真理が時代とともに変わることがないとしても、その真理への受容能力、すなわちその真理を正しく受け入れたり、理解したりする能力は、時代やその世界に支配的な文化的状況によって大きく変わるだろう。釈尊の入滅以後の時代にお

いて『法華經』は敵意や不信をもって迎えられらるだろう、と『法華經』が警告しているのは、『法華經』自身がこの事実と言及していることを明らかに示している。

この点については、『法華經』のみならずすべての仏典や仏教者の教典が、全体的に現在と比較的好都合な時代と状況を迎えているということを指摘しておきたい。



筆者によって完成した英訳「法華經」

十五、十六世紀の大航海時代に始まり、十八、十九世紀の植民地主義において頂点に達した西洋の文化的領土的拡張の長い時代はようやく終わりを迎えた。西洋の人々の文化的人種的優越性という信念は、その時代にあつては一般的であつたが、もはや今では一般には受け入れられていない

し、植民した人々の宗教であつたキリスト教も、現在では世界の国々の中で注目を得ようとして競争している多くの大宗教の一つにすぎない。

現代科学と法華經

私が生まれ育つたニューヨークの郊外の町では、知合いの人は皆、ユダヤ教、カトリック、プロテスタントの三つの宗教の一つに所属し、プロテスタントはさらに数多くの多様な分派に分かれていた。ヒンドウ教、仏教、イスラム教は、学校で名前を教えられただけの宗教であつた。

しかしながら現在ではアメリカにおける状況は大きく変化した。ここ数十年でアジア、中近東から来た多くの移民が国内のさまざまな場所に定住し、国民の宗教的所屬は昔よりはるかに複雑に、そして多様になってきている。アメリカ人は今では仏教やイスラム教のような宗教を、単に教科書で知るだけではなく、そのような宗教の中で育てられた人々と実際に接触することを通じて、それらの宗教を知りようになり、これらの宗教は急速に「ア

メリカ人の経験」の一部をなすようになってきた。私が一九九一年春、コロンビアで中国と日本の古典（『法華經』を含む）の最後の講義をした時には、クラスには中国人、韓国人、日本人、ヴェトナム人を祖先とする多くの学生がいたし、彼らの多くはその両親や祖父母から学んだことを通じて仏教について既にいくらかの知識を持っていた。今日において大部分のアメリカ人にとって、また同様に多くの西洋人にとって、仏教は以前のように奇妙な異国の宗教、不可解な考え方をする「遅れた」アジア民族の信仰ではなく、世界宗教であり、その教典や教えは真摯な注意や尊敬をもって扱われるべきものとなっていると思う。

もちろん今日のアメリカの特徴となっている宗教的多様性や、異なった宗教集団に所属している人々がお互いに持つ寛容の気運は、現代の大部分の人にとって、宗教が以前ほど重要な関心事にはなっていないことの反映にすぎない、と論ずる人もいるかもしれない。宗教は以前とは異なり社会的あるいは民族的集団の結合力ではなく、子供たちは両親や先祖の宗教を持つことをもはや

要求されることもなく、期待されることすらなくなった。そのような状況は全体としてたぶん、より大きな宗教的寛容をもたらすけれども、その状況はまた宗教に関して全くの無知や無関心をもたらすかもしれない。このことは余り望ましいことではなく、宗教的な事柄との結びつきを断たれ、そして自分だけのものと言える信念、信仰を「買ひあさっている」若い人々が、インチキな指導者や芳しくないカルトの魅力の餌食になることをもたらすかもしれない。

しかし『法華經』という主題に戻れば、今世紀、あるいはおそらく来るべき二十一世紀も、『法華經』や他の仏典の受容や理解にとって好都合な状況を与えるもう一つの点がある。それは、よく指摘されることだが、現代科学が仏典に見いだされると驚くほど類似した表現を使用しているという事実である。昔の人々は、天文学や地球や惑星系の生成の歴史について限られた知識しか持たず、時間や空間を比較的狭い範囲で考えるのに慣れていた。キリスト教でさえ世界創造をほんの数千年前に生じた出来事と見なしていた。しかしながら今では科学は

宇宙の性質と範囲を非常に大きな空間的・時間的単位の表現で記述し、その大きさを普通の人の想像力では考えることもできないほどである。

さらに現代科学のこのような記述やそのイメージ的表現はSFの書籍、映画、テレビ作品を通じて広まり、それは今ではある意味では日常生活の一部となっている。それゆえ過去の西洋人とは異なり、われわれは『法華経』の中に見いだされる表面的には空想的な記述やイメージ的表現、つまり我々の宇宙とは異なった無数の宇宙の記述や、計算することができないほど長い時間の記述などある宇宙から別の宇宙に自由に移動する生物の記述などには、もはや驚くことはない。実際、最近私が出版した『法華経』の翻訳に対して、ある批評家は『法華経』のイメージ的表現とSFのイメージ的表現の間の驚くべき類似性に直接言及していたほどである。

もちろん『法華経』において、そのような記述やイメージ的表現は科学的情報を伝達する意図を持っているのではなく、基本的に比喩的、宗教的な意図を持っている。それでもそのような表現のために、『法華経』の中の言

葉や、その言葉が伝達しようとしているメッセージは、昔の西洋人の読者とは異なり、今の我々には、風変わりにも、不自然にも思われないうし、それどころか現代の思想や表現の仕方にかなり適合していると思われる。

平和思想とイメージ的表現

『法華経』のイメージ的表現が現代の西洋人の読者に対して特に魅力的であると思われるもう一つの点がある。それは『法華経』の思想とイメージ的表現の両方に特徴的な明らかに穏和で平和な雰囲気である。日本に滞在した後でニューヨークに戻ると、メトロポリタン・ミュージアムに出かけ、収集された絵画を見て歩くのが私は好きだ。最近、たぶん日本の仏教美術に長い間親しんできたためでもあるだろうが、近代以前の西洋美術の展示室には、衝撃的で暴力的な性質を持った多くのイメージ的表現があることにいつも圧倒される。それらの美術作品は大部分が宗教的な性質を持ち、聖書の人物やキリスト教の聖人の生涯の出来事を描写したものである。旧約聖書からはゴリアテを殺すダヴィデやホロフェルネス

の切り取った首を持っているユデトの姿が描かれ、またキリスト教からはヘロデ王の幼児大虐殺、全身に矢を射られた殉教者聖セバスティアヌス、車輪の拷問にかけられている殉教者聖カタリナ、そしてもちろんすべての出来事の中で最も残忍で衝撃的なキリストの磔^{はりつけ}が描かれている。

すべての真の宗教的美術や文学の場合と同様に、そのようなイメージ的表現の表面的姿を越えて、その根底にある真理を評価しなければならないのは言うまでもないことである。しかしながら人は、そのようなイメージ自体に対するある本能的反応を避けることはほとんどできないし、特にそのイメージがそのような強烈な情緒的衝撃を与える場合には、そのことが当てはまる。キリスト教の中心的比喩は犠牲であり、それは古代において人々が磔^{はりつけ}されて殺された十字架のシンボルによって示されているが、犠牲は必然的に犠牲者や苦悩を含む。それとは対照的に、『法華経』や他の大乘仏典の最も重要なテーマは、教えを与えることであり、またその教えに感謝して布施をし、賞賛することである。その雰囲気は平和と

歓喜に満ち、暴力や悪の行為への言及はほとんどなく、諸仏に供養するものは、古いバラモン教のような血の供物ではなく、清浄や歓喜の象徴である華、香、音楽である。『法華経』のこの平和的で基本的に楽天的な見方は、私個人にとっては非常に魅力的であるし、現代の、そして来るべき二十一世紀の他の西洋人にとっても同様に魅力的であって欲しいと期待している。

十界と一念三千

私にとって『法華経』の思想やイメージ的表現が持つ他の魅力は、さまざまなレベルの存在の連続性、あるいは相互関係性と呼びたいものが『法華経』の思想にはあるということである。聖書、キリスト教神学には、世界のさまざまな無生物や生物はすべて神の手によって創造された存在であると記述されている。そして聖書のまさに冒頭の部分で、人間は「海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配」するように創造された」と述べられている（『創世記』1:26）。

このように人類は、伝統的な用語を使えば、「万物の

主人」として獣や鳥や他の生物のレベルから切り離された高いレベルに位置し、それらすべてを支配する権利を与えられているものとして描かれている。

人間の上にはさまざまな種類の天使が存在するが、人間と天使を区別する明確な境界線があるのかどうかは不明である。そして最上の位置に神が存在し、神は完全で全能であるから、神が創造したすべての対象から神は完全に切り離されている。このように、この思想体系においては、さまざまなレベルの存在は固定され、あるレベルから別のレベルに上昇したり下降したりする可能性はほとんど、いや全くないように思われる。人間と、より低いレベルの生物とを分離する境界線は特別に宣言されており、他方、全体系の創造者である神は、非常にすばらしく高いレベルに存在しているので、そのレベルに独りぼっちで存在している。

この聖書の思想は、西洋文明の思想や文化に非常に深い影響を与えてきたけれども、『法華経』のような仏典に見られる思想とは全く異なっている。これらの仏典は、宇宙の構造や存在の本質に関する初期インド人の考えを

利用しているけれども、はるかに流動的で厳密に区画化されていないさまざまなレベルの存在（衆生）という考えを示している。『法華経』の思想の中に描写されている十界について語ることが慣わしになっているが、それによれば、一番下のレベルにある地獄界から、餓鬼、畜生、阿修羅、人間のレベルを上昇し、ついには最高のレベルである仏のレベルに人は到達する。すべての仏典の中にこれらの十界の衆生が明確に描写されているわけではないが、大乘仏典には衆生のレベルの上昇というこの一般的な考えが明確である。そしてあるレベルから別のレベルを分離する明確な境界線がないということに注目することが大事である。

衆生の行う行為や衆生の得る知恵の程度によって、衆生はあるレベルから別のレベルに上昇したり、下降したりするのであり、今世で罪や愚かな行為を犯した衆生は、より低い、場合によっては一番低い地獄界で、次の来世を送るのである。他方、善いことを行い、悟りを求める衆生は、比較的より高いレベルの衆生に上昇し、ついには十界の最高である仏界に到達するのである。そして『法

華経』の根本的教えの一部として、一念三千、すなわち「一瞬の思念に三千の領域がある」という教義があると考える天台大師に従うならば、あるレベルから別のレベルに移行するのに来世を待つ必要さえない。天台の教義によれば、ある個人がある瞬間にどのようなレベルにあるかということにかかわらず、十界の生活はすべて、いかなる瞬間の個人にも潜在的には可能であり、それゆえ善い行いや知恵や信仰により、あるいは逆にそれらの欠如により、一生涯の間にレベルを上昇したり、下降したりするのである。

これらは高度に複雑な哲学的、教義的な事柄であり、この論文では詳論するつもりはない。私が指摘したい点は、『法華経』の中に表現されているさまざまなレベルの生活の相互関係性という思想が、先に概観した聖書的な思想よりも、この問題について現代の思想傾向にはるかに調和しているということである。もし人間を地球の他の生物の管理者として考えるならば、人間はこれまでずっと、特に今世紀においては、全くひどい管理者であったとしか言えない。人間の略奪的活動や、環境への無

神経な対処や、自然資源の乱開発により、人間は多くの他の生物種を絶滅したり、その瀬戸際に追い込んだりしてきた。日本のトキは最近の最も周知の事例の一つにすぎない。もし人間が無制限に「万物の主人」として行動することをやめず、自分たちの活動や生活様式を他の生活様式や生活レベルの活動に統合することを学ばないならば、人間は将来、他の生物種を絶滅に追いやり続けるだけではなく、自分自身の滅亡も迎えるだろうということが、世界中の思慮深い人々にはますます明らかになってきている。

一切衆生を救済する法華経

『法華経』に関して私が最もうれしく思うことの一つは、人間と非人間的な存在——鳩摩羅什はそれを表現するために『法華経』の翻訳では「人非人」という語句を使用した——がともにブッダの周りに集まり熱心にその教えを聞いたと描写してある点である。なるほど西洋の伝説でもアシジの聖フランチェスコは鳥にも説法したと言うし、あるキリスト教の神秘思想家たちは仏教的考え方

に非常に近い存在の唯一性あるいは全体性という考えを表現している。しかしキリスト教においては一般に、人間は不死の魂を所有していると思われる唯一の被造物だから、人間は救済の必要がある唯一の存在であり、それ故宗教的真理の教えは人間のためにのみあると考えられている。

それに対して『法華経』では、ブッダのメッセージは菩薩、縁覚、声聞のような宗教的な理解が進んだ衆生や、天界や人界の衆生に対してだけでなく、無数のそして多様な非人間的衆生にも同様に説教されている。これらの非人間的な衆生の多くは奇妙なサンスクリットの名前を持ち、インドの文化的伝統を知らない我々の多くには想像したり、思い浮かべたりすることも困難である。しかしこれらの衆生が、劣った衆生であるとか、集会の前列が神々や人間によって占められているのに対して、集会の後列に立っている二級の聴衆にすぎないとか、単純に見なされるべきではないことは、これらの衆生の一人、すなわち竜王の娘が、急速にしかも模範的に悟りを得たので集会の他のメンバーを驚かせ、恥じ入らせたという

ろん最もしばしば指摘される『法華経』の特徴の一つである。竜王の娘が集会の中で悟りを得てブッダになりうることを示した劇的な出来事については既に述べた。初期の仏教の教えは、少なくとも女性の姿のままでは、女性性は仏性を実現することはできないと主張していたが、この考えは『法華経』の中で明白に否定されており、この事実は現代のフェミニストの思想傾向と調和するものである。さらに『法華経』の別の箇所では、大部分の仏典で悪の見本として描写されている提婆達多という仏弟子が来世に成仏するだろうと書いてある。このように『法華経』は、どんなレベルの存在であろうと、また過去にどんなにひどい行為をしようが、彼らが永久に成仏から除外されるということはないことを明らかにしている。

一般的思想傾向と調和する法華経

初期の仏教は、家族生活を捨て出家者集団のメンバーとなった僧や尼と、出家者集団に布施し、彼らを養う普通の在家信者との間にかなりはつきりした区別をする傾向があった。出家者はもちろん多くの戒律を守り、普通

事実により劇的に示されている。

なるほど一番下のレベルの生活をなす者である餓鬼や地獄の衆生は、法が説かれるこれらの集会に参加していることは示されていないが、それはおそらく彼らをそのレベルの生活に落とすカルマのために、彼らはそのときには参加することができなかったであろう。しかし『法華経』はどんなレベルの生活にある衆生でも仏性を持ち、すべての衆生は同様に潜在的には成仏することができることを明らかにしているから、仏の教えは適当なときに彼らにも伝達されることは疑う余地がない。というのには『法華経』が繰り返して述べているように、あらゆるレベルの生活にある衆生を意味する「一切衆生」を救済することがブッダたちの目的であるからだ。そして『法華経』に基礎を持つ天台宗の教義は、さらに進んで、植物や木、さらには石のような無生物さえもが、仏性を持ち、ブッダたちの教えに応答することができると主張している。

教えの普遍的適用可能性の概念、すなわちすべての存在に潜在的には悟りの可能性があるという考えは、もち

の信者とはかなり異なった生活を送らなければならなかった。しかしそのような献身と引き換えに出家者は在家信者が到達できないレベルの知恵や精神的悟りを得ることができると信じられていた。

しかしながら大乘仏教においては在家と出家とのはっきりした境界線は不鮮明になり、あまり重要な意味を持たなくなった。『法華経』においてはブッダは出家者にも在家信者にも同様に法を説き、両者とも精神的向上や最高のレベルの知恵に到達する平等の機会があることを明確に示している。

重要なことは、個人の信仰と精進であり、僧侶集団に所属しているのか、在家集団に所属しているのかは無関係である。この点では他の大乘仏典の『維摩経』の中ではより明確にされており、その中では主人公、維摩詰は釈尊時代の裕福な在家信者であったが、彼はブッダの出家の弟子のだれよりも高いレベルの精神的悟りを得たことを述べている。

キリスト教には洗礼、聖餐（ミサ）、結婚のようなサクラメントという儀礼があり、少なくともキリスト教の

ほとんどの宗派において、その儀礼は聖別された僧侶によつてなされる場合のみ有効であると信じられている。

このように聖職者は在家信者には近付けない精神的力を持ち、そのような力が必要な状況、多くの場合信者の生活や信仰にとつて最も重要な関心事となる状況においては、在家信者は聖職者に依存しなければならぬ。

私の知る限り、仏教には、バラモン教、古代ユダヤ教、キリスト教とは異なり、在家信者に恩寵すなわち精神的恩恵を与える力をもった聖職者の階層はなかった。

仏教でも世俗的生活を捨て出家者集団のメンバーになった信者は、大部分の在家信者より宗教的事柄に多くの時間と精力を捧げることができ、仏典や仏教的儀礼の専門家になれるので、特に尊敬を受けていた。しかし彼らの役割は、後期ユダヤ教のラビのように、主に教師、教義の説教者、宗教的共同体の指導者の役割であった。彼らは信者に悟りすなわち精神的向上を与える力を持っていない。悟りは、僧であろうと尼であろうと、在家の信者であろうと、個人の信仰と精進によつて実現しなければならない。社会的背景や身分とは無関係に、個々の信

者の重要性を強調し、精神的向上の潜在的可能性が信者に開かれていることをこのように強調することは、『法華経』に典型的に示されているような大乘仏教の教えが、今世紀の一般的思想傾向と調和することを示している点である。

このことは『法華経』のすべての思想が、現代の読者にとつて、特に私のように西洋文化の中で教育された人々にとつて、必ず魅力的である、あるいは容易に理解できるといふことではない。人の善い、あるいは悪い行為は必ずその果報をもたらし、その人の生涯を形成するというカルマの考えは、十分合理的であると思われるし、実際にある程度はほとんどすべての宗教の思想の一部となつていふと思われる。しかしそういうカルマが非常に長い時間を経て作用し、その果報は継続的な来世の生涯にさまざまな形で出現するという考えは、個人の生活を分離的、独立的な単位と考へがちな大部分の西洋人にとつては、奇妙に思われるだろう。そして空虚であること、あるいは非二元論を意味する空の概念は、コロンビアでの授業の経験からすると、どんな文化的背景を持つてい

ようと、大部分の人にとつては、極端に理解するのが困難である。

さらに『法華経』の雰囲気は大部分が温和で明るいものではあるが、『法華経』を誹謗する人々が受ける罰を記述する場合の『法華経』の言葉は、驚くほど荒々しい。そして『法華経』は供養の一つの形式として自分の身体や腕を燃やす人を描写しているが、そのイメージ的表現は明らかに比喩的であり、文字通りに受けとられるべきではないが、その表現は人を寄せ付けないところがある。

しかしながらこれらの小さな欠点を除けば、上述したように、『法華経』には明らかに現代の西洋人の読者にとつて魅力的な点が多くある。もし『法華経』が、適切な説明的資料とともに正確で読みやすい翻訳により読むことができるようになれば、そして宗教的思想の「自由市場」の中で自由に流通することができるようになれば、多くの西洋人は、特に若い人々は、『法華経』に魅力を感じると思われる。『法華経』が将来どのような状態とられ、その思想やイメージ的表現が二十一世紀の状態や方向にどのような影響を与えるのか、興味深いもの

がある。

(バートン・ワトソン／元コロンビア大学教授)

(みやた こういち／創価大学教授)